

北杜立長坂小学校自己評価書（前期）

校長 堀内正基

記述者 教頭 向井浩輔

＜本年度の学校教育目標＞

『自ら学び 進んで鍛え 共に伸びる 長小の子』

やさしい子 かしこい子 たくましい子 力を合わせる子

＜本年度の経営方針＞

- 1) 子どもたち一人ひとりを大切にし、それぞれが学校生活に喜びを感じ、自主的・意欲的に学習に取り組む子どもを育てる。
- 2) 人権尊重の精神を基底に、教職員相互・教職員と子どもとの心と心のふれあう民主的な学校経営に努める。
- 3) 「知・徳・体」のバランスのとれた子どもの育成のため、学校教育目標の具現化を図る取り組みをする。
- 4) 不断の研修・実践を積み上げ、互いに磨き合い、高め合う中で教育観の確立と指導力の向上を図る。
- 5) 教育環境の整備・充実に努め、その機能を有効適切に生かし、教育効果の向上に努める。
- 6) 学校・家庭・地域が連携し、地域資源の活用を図ると共にキャリア教育の充実に努め、地域に信頼される開かれた学校づくりに努める。

I 全体評価

自己評価を「学校教育目標・学校経営について」、「学校運営について」、「学習指導について」、「生徒指導について」、「地域との連携について」、「学校の特色に関して」の6観点からアンケートを基に行った（アンケートは、A：そう思う、B：ややそう思う、C：ややそう思わない、D：そう思わない、の4段階評価）。

職員は、年度末の異動により比較的大きい入れ替えがあった。受け持つ学級や校務の分掌も変わったりして、回答者個々人の評価基準も昨年度のものとは若干変わっていることが考えられる。また、母数が小さいために、1名の評価の変化に伴い肯定率が大きく変わることも踏まえ、結果については全体の傾向としてとらえることとする。児童についても、担任が変わったりクラスが変わったりした子どもも多く、昨年度のデータと比較することは難しい。また、その学年その学年の構成員による特性などもあり、同じ学年だからといって単純に昨年度のデータと比較することはできない。詳しくはその学年の年次を追って調べる必要もあるが、ここでは、あくまで前期の学校評価の結果として、現時点での扱いとする。後期には児童の変容を追っていくことが出来ると考える。保護者のアンケートについても同様に考える。

さて、教職員のアンケート結果を見ると、全47項目中、42の項目で90%（A+B）以上の肯定率を示している。児童のアンケート結果を見ても、全24項目中17項目において90%以上の肯定率、保護者についても全19項目中18項目について90%以上の肯定率を示している。これもまた高い肯定率である。

数値をみる限りは、前期はまだまだ手探りの状況の中での自己評価とも言えるが、全体的には安定した学校運営であり、児童の学校生活も安定的な状態であるとする結果が得られている。以下、職員の評価を基に6つの観点から具体的に考察していく。

Ⅱ 各項目ごとの評価結果（達成状況・改善策）	
1 「学校教育目標・学校経営について」	
達成状況	全ての項目で、A（そう思う）またはB（ややそう思う）が90%以上の肯定的評価が得られている。このことから、「学校教育目標・学校経営について」は、充実したものになっていると考えられる。ただし、各項目は内容も広く、判断の基準も難しい。具体的に捉えられないものもあるため、常に学校経営方針および学年・学級の経営方針に立ち返り、教育活動を進めていきたい。
2 「学校運営について」	
達成状況	8項目の内、5項目で、A（そう思う）またはB（ややそう思う）が90%以上の肯定的評価が得られている。残りの3項目についても80%以上の肯定率であることから、円滑に「学校運営」が進められていると考える。個々に見てみると、「危機管理マニュアルを理解している」と「職員会議に積極的に関わっている」と「校内研究に主体的に関わっている」の肯定率が80%台であり、神経質になる必要はないが、後期に向けての若干の運営改善が必要である。児童・保護者のアンケートで関連するものはない。
改善策	<p>危機管理については確実な対応が求められる。子どもの命を預かる責任や危機管理意識の向上と共に実際の場面では臨機応変な対応が求められることに対して、完全な動きがとれるかどうかの不安などもあると考える。児童の様子からも、絶えず意識していないと確実な行動には結びつかないことが分かる。防災教育を進める一方で、シチュエーションを変えながら具体的、実際の訓練を繰り返し行い、職員の危機管理マニュアルの理解と行動の定着を図ってきたい。</p> <p>職員会議については、校長の諮問機関というその性質から職員全員の意見が反映されるものではない。また、分掌によっては直接的な関わりがないものもあるかもしれない。積極的な関わりの解釈には、決定したことに対してどう取り組んでいるかという判断基準が必要と考える。いずれにしても、子どもたちを育てるためにという共通理解においては職員間の温度差があってはならないと考える。</p> <p>校内研究の関わりについては、県の指定を受け、制約がある中で研究を進めざるを得ない場面もある。公開授業も迫っている中で、授業主体の研究会が部会研究会という形で続いている。このため、職員会議と同様に、分掌によっては直接的な関わりがないと感じる内容もあるかもしれないが、目の前の子どもたち、やがて目の前にする子どもたちのために、高い意識を持って、自分たちに戻ってくる研究にしていかなければならない。</p>
3 「学習指導について」	
達成状況	全ての項目で、A（そう思う）またはB（ややそう思う）が90%以上の肯定的評価が得られている。このことから「学習指導について」は、ほぼ充実していると考えられる。それは児童のアンケートからも「先生は分かりやすく勉強を教えてくれる」が98.4%と高い数値になっていることから伺える。ただし、職員の「あなたは質問や発言が出てくる授業を行っている」91.7%に対し、児童の「授業中に発言や質問、意見を言いますか」の項目は肯定的評価が78.8%にとどまっている。
改善策	授業中のは発言については、教師は発言の回数や人数、挙手するしないではなく質の高い質問や意見が出るように授業を進めているかどうかと設問を捉えているのに対し、児童は、挙手をし

善策	<p>て指名されないと自分の考えを伝えたことにならないという設問のとらえ方をしているのではないかと考える。学習面については他の項目で良い結果が表れてきているので、校内研究で進めている授業改善プランに基づく授業をより充実させ、教師の積極的な働きかけが後期に更に良い結果となって表れることを期待したい。</p>
4 生徒指導について」	
達成状況	<p>8項目の内、6項目で、A（そう思う）またはB（ややそう思う）が90%以上の肯定的評価が得られている。「キャリア教育を児童の実態に応じて行っている」、「学校は職員間で生徒指導上の課題を共有した対応をしている」については肯定的評価が80%台である。また、児童のアンケートでは、「クラスはみんな仲良しと思いますか」、「困ったときに相談できる友達はいますか」、「困ったときに相談できる先生がいますか」、「家の人に学校での様子を話していますか」、の項目について、肯定的評価が70%80%台である。また、保護者のアンケートでは、全項目の中で唯一「子どもは(将来の夢や)目標を持って学校生活を送っている」が75%と落ち込んでいる。(他は全て90パーセント以上)</p>
改善策	<p>キャリア教育については、キャリア教育の意義が現場に十分浸透していないことやキャリア教育の目標を現場にどのように反映させていくかについて、学ぶための実践例が少ない実態があると考え。県の研修会に参加した職員による校内研修会を実施するなどしてキャリア教育の理解に努める。生徒指導については、400人近くの子どもたちがいれば、全体にも個々にも生徒指導上の問題があって当然であるし、実際にいくつかの事例が発生している。大切なことは、問題に対してどう対応するかである。一人の職員が抱え込まずに、報告・連絡・相談の体制を素早く取り、場合によっては保護者も含めて問題を担当を中心に協同的に正しい方向に導くことに努力している。また、予防という面からも、QUTESTの結果やチェックリストなどを利用して子どもたち一人ひとりの様子を把握したり、他者への思いやりの気持ちや規範意識、公共のものを大切にするといった道徳的な心情や判断力の育成にも力を入れていく必要がある。いずれにしても、全校的な視野に立つと同時に、児童一人一人の内面理解にも努め自尊感情を育てていきたい。</p>
5 「地域との連携について」	
達成状況	<p>9項目全てで90%以上の肯定的評価が得られていることから「地域との連携について」は、ほぼ充実したものになっていると考えられる。保護者のアンケートからも「学校は保護者や地域の要望に応えようとしている」、「学年、学級からのお便りなどで学校のことが良く伝わっている」と感じている保護者が90パーセント以上いることが分かる。</p>
改善策	<p>本年度は学校ボランティアとして多くの保護者や地域の方に本校の教育活動に協力していただいている。学校への協力を願う中で、本校の教育活動に対して理解していただいたり意見をいただいたりしている。また、学校からは学年・学級をはじめ、分掌担当を通して様々な情報を発信している。今後も一方通行にならないように双方向的な関係をそれぞれに作っていくことが大切と考える。</p>
6 「学校の特徴に関して」	
達成	<p>6項目全てで90%以上の肯定的評価が得られている。児童のアンケート結果からも「地域の人のあったら挨拶をしている」が94%の肯定的評価となっている。しかし、学校内での児童の挨拶の様子は芳しいものはなく、指導はしているし児童も挨拶は良いことだと感じているけれど</p>

状況	<p>も、実際には気持ちの良い挨拶までには結びついていないという現実がある。また、「ボランティア活動に頑張っている」と答えている児童は70%台で、ボランティア活動がよいことは分かっているが、何をどうすればよいのかが分からない児童が多いと考えられる。</p>
改善策	<p>数字の上では本校の特色を生かした教育活動が展開されていると考えて良いが、果たして6項目の設問が本校の特色として職員一人一人に共通に理解されているかどうかは大事なポイントである。素直な子どもたちの実態、地域性、校舎の構造、中学校との連携など様々な観点から本校の特色は何であるか、それを最大限活かしていくにはどんな手立てや戦略が必要かなどを検討するプロセスがあって、初めて正しく評価出来ると思う。また、児童にも本校の一員としての自覚や誇りを持たせ自尊感情を高める意味でも、本校の特色について考えさせたい。職員も児童も折に触れ話題にしながら、時に時間をかけて考えるなどする継続的な取組をすることによって特色ある学校づくりに努めていきたい。</p>
<p>Ⅲ まとめ</p> <p>〈成果〉</p> <p>本年度の学校経営の方針と一つひとつの評価項目がどのように連動しているか、その相関関係を直接的に見ることは難しいが、職員、児童、保護者ともに高い肯定率を示す個々の集計結果からは、学校経営の方針に沿った安定した教育活動が相対的に展開されていると考えてよい。また、調査の結果から児童と職員との関係も良好で、種々の取組みを通してよい関係が築かれていると考える。職員が意識と研修を継続し、学習面、生活面で子どもたちとの信頼関係を築くことに努力しながら安定した状態を維持していると考え。</p> <p>〈課題〉</p> <p>全体として安定した教育活動が展開されていると言えるものの、評価項目には表れない一つひとつの具体的な活動にはまだまだ課題も多い。児童の安全確保のための取組みや学習指導、生徒指導の充実など、随時改善していかなければならないものもある。注意深く児童一人ひとりの教育に責任を持って臨まなければならない。今後も広く提言を聞きながら地域・家庭・学校が連携して、統合間もない長坂小学校の校風とよりよい伝統を児童とともに築いていきたい。</p>	